

シリーズ 視覚障害者の大学進学 別冊

視覚障害学生実態調査報告書

平成 21 年（2009 年）6 月発行

全国高等学校長協会特別支援学校部会

全国盲学校長会大学進学対策特別委員会

目 次

はじめに-----	1
調査方法-----	1
1. 対象者のプロフィール-----	2
2. 入学前の支援-----	4
3. 資料の入手-----	6
4. 資料の提出-----	10
5. 講義等-----	15
6. 定期試験-----	20
7. 図書館・参考資料室-----	25
8. 学習室・専用ロッカー-----	27
9. 支援機器・視覚補助具-----	28
10. 施設・設備-----	33
11. 視覚に障害のある友人との関わり-----	34
12. 高校時代に身につけておくべき力-----	35

はじめに

近年、視覚障害のある学生が大学のさまざまな学部・学科に進学するようになり、大学における学習支援のための相談が盲学校（視覚特別支援学校）に多く寄せられています。また、盲学校の生徒が大学受験をする際に、事前に行われる話し合いの場でも、入学試験の実施方法だけでなく、入学後の授業への参加、教科書の点訳体制、定期試験の実施方法、大学で備えるべき支援機器、通学および学内の移動方法などが話題になります。

本委員会では、これまで全国高等学校長協会特別支援学校部会から頂いた補助により、パンフレット「視覚障害者の大学進学」として入学試験・学生生活・支援機器・就職の4つのタイトルにまとめ作成し、各大学や盲学校等に配付してまいりました。今回は、視覚障害学生実態調査として、各大学に在籍中の学生に、学生生活をおこなう上で受けている支援の現状と本人が本来希望している支援についてアンケートを実施し、当事者の声をシリーズの別冊としてまとめました。40名を超える視覚障害学生から回答が得られ貴重な意見も多く寄せられました。

本誌が、視覚障害学生をとりまく多くの方々に読まれ、よりよい支援の参考となることを祈念する次第です。

最後に、調査項目の検討や結果の分析、報告書の作成において貴重な助言を頂きました広島大学の小林秀之氏、筑波大学の佐島毅氏、青柳まゆみ氏に御礼申し上げます。また、直接一人一人の学生達にインタビューをし、データをまとめて頂いた筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻の森まゆさんと呉純慧さんのお二人に感謝いたします。さらに、インタビューやデータ入力のために筑波大学・大学院の多数の学生の方々にご協力いただきました。深く御礼申し上げます。

平成21年6月

全国盲学校長会大学進学対策特別委員会委員長

引田 秋生

調査方法

この報告書は、2008年8月から2009年3月にかけて、全国の大学に在学する視覚に障害のある学生を対象に、大学生活における支援について、現状の支援内容と本人の希望を、質問紙を用いて調査しまとめたものです。墨字使用学生には質問紙を配布し、自筆で記入してもらいました。点字使用学生には口頭でインタビューし、質問者が回答を書き取りました。一人あたりの調査時間は、約90分でした。

質問紙の内容は、①プロフィール、②入学前の支援、③資料の入手、④資料の提出、⑤講義等、⑥定期試験、⑦図書館・参考資料室、⑧学習室・専用ロッカー、⑨支援機器・視覚補助具、⑩施設・設備、⑪視覚に障害のある友人との関わり、⑫高校時代に身につけておくべき力の12項目でした。各質問は、原則として、選択肢から適当なものを選び回答する形式としましたが、一部自由記述を求める質問もありました。

本報告書では、回答を点字使用学生と墨字使用学生の別に集計し、まとめました。

1. 対象者のプロフィール

対象者のプロフィールを表 1-1 に示します。

表1-1 対象者のプロフィール

	点字	墨字	合計		点字	墨字	合計		
性別	男	11	8	19	専攻分野	語学	4	1	5
	女	17	5	22		社会科学（教育・心理以外）	12	5	17
年齢	18歳	3	0	3	人文科学	4	2	6	
	19歳	4	3	7	教育・心理学	5	1	6	
	20歳	7	5	12	理系	0	2	2	
	21歳	11	2	13	音楽	3	2	5	
	22歳	2	3	5	在学大学への入試形態	A0・自己推薦	15	5	20
	23歳	1	0	1		学校推薦	7	2	9
学年	1年	6	2	8		障害者特別推薦	3	0	3
	2年	8	4	12		各大学の個別学力入試	2	4	6
	3年	8	5	13		大学入試センター試験と 各大学の個別学力入試の両方	0	2	2
	4年	6	2	8		社会人入試	1	0	1
視力	0.03未満	25	1	26	小学校の教育経験 ^b	盲学校	17	2	19
	0.03～0.1未満	3	6	9		通常学校	9	7	16
	0.1～0.3	0	6	6		弱視通級指導教室	2	6	8
						その他の特殊学級	2	0	2
使用している補助具 ^a	近用レンズ	2	11	13	中学校の教育経験 ^b	盲学校	24	7	31
	遠用レンズ	1	11	12		通常学校	3	5	8
	拡大読書器	3	6	9		弱視通級指導教室	0	1	1
				その他の特殊学級		1	1	2	
視覚障害の発症時期	小学校入学前	27	11	38	高等学校の教育経験	盲学校	26	10	36
	小学校	1	1	2		通常学校	2	3	5
	中学校	0	1	1	現在の居住形態	大学の寮	4	0	4
視覚障害の原因	未熟児網膜症	5	2	7		アパート等での一人暮らし	12	6	18
	網膜芽細胞腫	6	0	6		家族と同居	12	7	19
	緑内障	5	1	6					
	網膜色素変性症	2	2	4					
	その他	10	8	18					

a:使用している学生のみ的人数

b:小・中学校においては校種を越えての転校があるため、合計人数が延べ人数

対象者は視覚障害のある大学生 41 名（男 19 名・女 22 名）、平均年齢 20.3 歳でした。学年は、1 年次 8 名、2 年次 12 名、3 年次 13 名、4 年次 8 名、使用文字は、点字 28 名、墨字（拡大文字を含む）13 名でした。

視力は、0.03未満が26名、0.03～0.1未満が9名、0.1～0.3が6名でした。視覚障害の発症時期は、小学校入学前38名、小学校在学中2名、中学校在学中1名で、ほとんどが先天性の視覚障害でした。主な視覚障害の原因は、未熟児網膜症7名、網膜芽細胞腫6名、緑内障6名、網膜色素変性症4名、その他18名でした。

専攻分野は、文系34名、理系2名、音楽系5名でした。在学大学に合格した入試形態は、AO・自己推薦20名、学校推薦9名、障害者特別推薦3名、社会人入試1名で、推薦制度を利用した入試で合格した学生が圧倒的多数を占めました。大学入試センター試験を利用した入試を受けて合格した学生は2名でした。これは、視覚に障害のある学生は短時間に大量の問題を処理するような試験では実力を発揮しにくいと考えられます。

教育経験を見ると、盲学校在籍は小学部19名、中学部31名、高等部36名とだんだん増加していました。逆に、通常学校在籍は小学校16名、中学校8名、高等学校5名と減少していました。なお、小学校・中学校においては校種を越えての転校があるため、それぞれの合計人数は延べ人数となっています。学習内容が複雑化し、扱う情報量が増える中学校や高校になると、点字使用者・墨字使用者ともに盲学校の在籍者数が増えていることがわかりました。

現在の居住形態は、大学の寮4名、アパート等での一人暮らし18名、家族と同居19名で、約半数が一人暮らしをしていました。

対象者の在籍大学数は31で、うち短期大学が1校（1名）でした。なお、障害者のみを対象とする大学は含まれていません。在学大学を表1-2に示します。

視覚に障害のある大学生の数が極めて少ないことと、支援を受けていない弱視者を特定することは困難であることとを考慮すると、41名の当事者、特に点字使用学生28名を対象に調査できたことは特筆すべきであり、価値の高い調査となりました。

表1-2 対象者の在籍大学

点字使用学生	墨字使用学生
桜美林大学 リベラルアーツ学群	青山学院大学 理工学部
桜美林大学 ビジネスマネジメント学群	桜美林大学 ビジネスマネジメント学群
大阪芸術大学 芸術学部	大正大学 人間学部
大阪人間科学大学 人間科学部	東京音楽大学 音楽学部
京都光華女子大学 短期大学部	東洋大学 法学部
京都光華女子大学 文学部	同志社大学 工学部
金城学院大学 文学部	桐朋学園大学 音楽学部
恵泉女学園大学 人間社会学部	南山大学 外国語学部
恵泉女学園大学 人文学部	二松學舎大学 文学部
国際基督教大学 教養学部	姫路獨協大学 外国語学部
四国学院大学 社会福祉学部	フェリス女学院大学 国際交流学部
四天王寺大学 人文社会学部	武蔵野大学 現代社会学部
創造学園大学 創造芸術学部	
桐朋学園大学 音楽部	広島大学 教育学部
東洋大学 社会学部	
東洋大学 法学部	
日本福祉大学 経済学部	
日本福祉大学 国際福祉開発学部	
日本福祉大学 社会福祉学部	
佛教大学 社会学部	
立教大学 コミュニティ福祉学部	
立命館大学 産業社会学部	
流通経済大学 社会学部	
ルーテル学院大学 総合人間学部	
和光大学 人間関係学部	
筑波大学 人間学群	

2. 入学前の支援

入学前の支援として、「学内の建物の配置などに関するオリエンテーション」、「教職員との打ち合わせ」、「寮やアパートの斡旋」について、各支援が実際に入学前にあったかどうか（現状）、及び支援を希望する程度について質問しました。現状については、「なかった」を0点、「あった」を1点、希望については、「必要ない」を0点、「できたらほしい」を1点、「必ずほしい」を2点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点で割った値を求めました。その結果を図2-1（点字使用学生）、図2-2（墨字使用学生）に示します。なお、「寮やアパートの斡旋」については一人暮らしをしている学生のみを示してあります。

(1) 学内の建物の配置などに関するオリエンテーション

点字使用学生では、現状の値は0.71でしたが、希望は0.91でした。墨字使用学生では、現状は0.46、希望は0.54でした。点字使用学生は学内の建物の配置などに関するオリエンテーションの希望がかなり高く、墨字使用学生もある程度希望していることから、オリエンテーションの必要度が高いことがわかりました。これは、視覚障害学生は初めての場所での単独移動が困難であるためと考えられます。したがって、ある程度慣れるまでは学内移動の支援が必要となります。

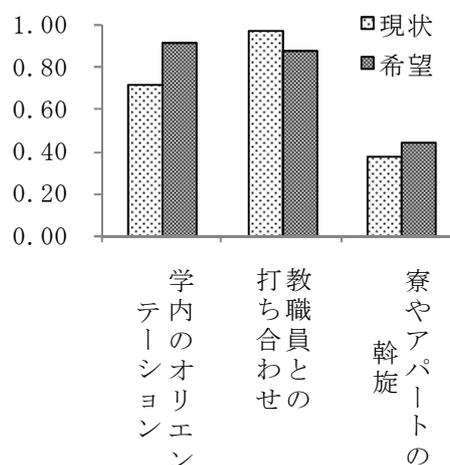


図2-1 入学前の支援（点字）

(2) 教職員との打ち合わせ

点字使用学生では、現状0.96、希望0.88でした。墨字使用学生では、現状0.92、希望0.54でした。いずれの場合も現状でほぼ100%打ち合わせが行われており、希望もある程度高い値でした。入学前の打ち合わせは、その学生が使用する文字で作成された教科書の準備や、教職員の理解促進等のために必要と考えられます。

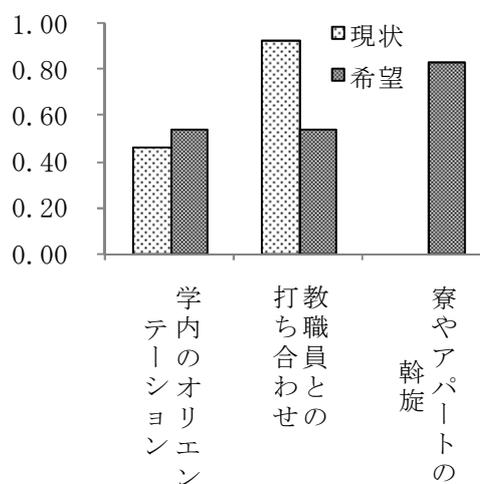


図2-2 入学前の支援（墨字）

(3) 寮やアパートの斡旋

点字使用学生では、現状0.38、希望0.44でした。墨字使用学生では、現状は支援を

受けた学生はいませんでした。希望は 0.83 でした。視覚障害学生がアパートを借りる場合、貸し主の障害者に対する偏見から契約を断られる場合も少なくありません。また、点字教科書や支援機器等、学習に欠かせない持ち物が一般の学生よりも多いため、十分なスペースが必要となります。そのような理由から、寮やアパートを見つける上で大学の支援が求められることがあると考えられます。

3. 資料の入手

「学生生活上必要な規則やシラバス等の冊子」、「教科書等」、「教員・他の学生からの資料」、「事務からの連絡等」の資料の入手形態について、現状と希望を質問しました。入手形態は以下の 9 形態とし、現在利用している形態、及び希望する形態をすべて選んでもらいました。その結果を、点字使用学生・墨字使用学生別に表に示します。なお、表の網掛け部分は、利用している、または希望している割合が最も高かった資料の入手形態です。

- ・ 点字
- ・ 資料の作成者から提供されたオリジナルの電子データ（電子メールによる入手を含む）
- ・ web から入手
- ・ スキャナと OCR(光学式文字認識)ソフトを活用して作成した電子データ
- ・ 対面朗読
- ・ 音訳（録音）
- ・ 拡大コピー
- ・ 普通文字（通常の印刷された配布形式）
- ・ 未入手

（1）学生生活上必要な規則やシラバス等の冊子

「学生便覧」、「シラバス」、「履修要覧」について質問しました。表 3-1-1 に点字使用学生、表 3-1-2 に墨字使用学生の結果を示します。

点字使用学生では現状で最も割合が高かった形態を資料ごとに示すと、学生便覧で「未入手」(39.3%)、シラバスで「web」(53.6%)、履修要覧で「対面朗読」(57.1%)でした。シラバスは約半数が web を活用し、独力で読んでいることがわかりました。しかし、学生便覧や履修要覧については、独力で読める形態で入手できていない学生が多くいました。一方、希望を見ると「オリジナルの電子データ」の割合が、学生便覧(57.1%)と履修要覧(39.3%)で1位、シラバス(28.6%)で2位、「web」の割合はシラバス(53.6%)で1位、学生便覧(28.6%)と履修要覧(28.6%)で2位でした。したがって、独力で読めるオリジナルの電子データや web を希望する割合が高いことがわかりました。

墨字使用学生では、現状で最も割合が高かった形態はいずれの資料でも普通文字で、そ

の割合は、学生便覧 84.6%、シラバス 92.3%、履修要覧 92.3%でした。希望を見ると、普通文字の割合が少し低くなり、その分電子データの割合が高くなっていました。

表3-1-1 学生生活上必要な規則やシラバス等の冊子(点字)

		点字	オリジナルの電子データ	web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
学生便覧	現状	3.6%	10.7%	21.4%	3.6%	17.9%	0.0%	0.0%	10.7%	39.3%
	希望	21.4%	57.1%	28.6%	3.6%	3.6%	0.0%	0.0%	0.0%	
シラバス	現状	10.7%	25.0%	53.6%	3.6%	25.0%	0.0%	0.0%	3.6%	3.6%
	希望	17.9%	28.6%	53.6%	3.6%	17.9%	0.0%	0.0%	3.6%	
履修要覧	現状	0.0%	17.9%	25.0%	0.0%	57.1%	0.0%	0.0%	3.6%	7.1%
	希望	25.0%	39.3%	28.6%	0.0%	28.6%	0.0%	0.0%	3.6%	

表3-1-2 学生生活上必要な規則やシラバス等の冊子(墨字)

		点字	オリジナルの電子データ	web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
学生便覧	現状	0.0%	7.7%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	23.1%	84.6%	0.0%
	希望	0.0%	15.4%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	15.4%	84.6%	
シラバス	現状	0.0%	15.4%	53.8%	0.0%	0.0%	0.0%	15.4%	92.3%	0.0%
	希望	0.0%	23.1%	38.5%	0.0%	0.0%	7.7%	23.1%	69.2%	
履修要覧	現状	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	46.2%	92.3%	0.0%
	希望	0.0%	23.1%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	23.1%	76.9%	

(2) 教科書等

「語学の教科書」、「理数系の教科書」、「語学や理数系以外の指定教科書」、「参考図書」について質問しました。表 3-2-1 に点字使用学生、表 3-2-2 に墨字使用学生の結果を示します。

点字使用学生では、現状で最も割合が高かったのは「点字」で、語学の教科書 89.3%、理数系の教科書 35.7%、語学や理数系以外の指定教科書 60.7%、参考図書 39.3%でした。希望では、語学の教科書 96.4%、理数系の教科書 78.6%と、点字の割合がきわめて高い結果となりました。語学や理数系以外の指定教科書では「点字」が1位(75.0%)、「オリジナルの電子データ」が2位(42.9%)でした。また、参考図書においては「オリジナルの電子データ」が1位(46.4%)、「点字」が2位(39.3%)でした。

以上のことから、語学や理数系の教科書では文字や式を正確に読む必要があるため、点字が必須であることがわかりました。語学や理数系以外の指定教科書や参考図書については、点字の希望が高いとともに、オリジナルの電子データの希望も高い結果となりました。オリジナルの電子データはパソコンを使って画面読み上げソフトで聞いたり、自動点訳ソフトを使って点字で印刷したりして読んでいると考えられます。

その他、語学や理数系以外の指定教科書については、「スキャナと OCR ソフトを活用して作成した電子データ」が現状で 42.9%、希望で 3.6%、「対面朗読」が現状で 25.0%、希望で 7.1%でした。このような結果から、OCR を用いた電子データや対面朗読の希望は低い

にもかかわらず、現状では利用せざるを得ない学生がある程度いることがわかりました。

墨字使用学生については、現状はいずれも「普通文字」の割合が最も高く、語学の教科書 92.3%、理数系の教科書 61.5%、語学や理数系以外の教科書 92.3%、参考図書 100%でした。希望では、「拡大コピー」の割合が、語学の教科書 (61.5%) と理数系の教科書 (53.8%) で1位、「普通文字」の割合が、語学や理数系以外の指定教科書 (61.5%) と参考図書 (53.8%) で1位でした。ただし、すべての資料で2位までに、「拡大コピー」と「普通文字」のいずれかが入っていました。

表3-2-1 教科書等 (点字)

		点字	オリジナルの電子データ	web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
語学の教科書	現状	89.3%	10.7%	0.0%	21.4%	7.1%	0.0%	3.6%	3.6%	0.0%
	希望	96.4%	17.9%	0.0%	3.6%	3.6%	3.6%	0.0%	0.0%	
理数系の教科書	現状	35.7%	3.6%	0.0%	0.0%	10.7%	0.0%	3.6%	3.6%	0.0%
	希望	78.6%	17.9%	0.0%	0.0%	7.1%	0.0%	3.6%	0.0%	
語学や理数系以外の指定教科書	現状	60.7%	39.3%	3.6%	42.9%	25.0%	10.7%	0.0%	3.6%	14.3%
	希望	75.0%	42.9%	3.6%	3.6%	7.1%	3.6%	0.0%	0.0%	
参考図書	現状	39.3%	3.6%	17.9%	17.9%	28.6%	10.7%	0.0%	0.0%	21.4%
	希望	39.3%	46.4%	10.7%	10.7%	17.9%	3.6%	0.0%	0.0%	

表3-2-2 教科書等 (墨字)

		点字	オリジナルの電子データ	web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
語学の教科書	現状	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	38.5%	92.3%	0.0%
	希望	0.0%	15.4%	0.0%	0.0%	7.7%	7.7%	61.5%	53.8%	
理数系の教科書	現状	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	7.7%	61.5%	15.4%
	希望	0.0%	15.4%	7.7%	0.0%	7.7%	7.7%	53.8%	46.2%	
語学や理数系以外の指定教科書	現状	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	38.5%	92.3%	0.0%
	希望	0.0%	23.1%	0.0%	0.0%	7.7%	7.7%	46.2%	61.5%	
参考図書	現状	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	23.1%	100.0%	7.7%
	希望	0.0%	30.8%	7.7%	0.0%	7.7%	15.4%	46.2%	53.8%	

(3) 教員・他の学生からの配布資料

「授業のプリント」、「学生の発表資料」、「提出したレポートに対するコメント」について質問しました。表 3-3-1 に点字使用学生、表 3-3-2 に墨字使用学生の結果を示します。

点字使用学生では、いずれについても現状・希望ともに「オリジナルの電子データ」の割合が最も高い結果となりました。現状では、授業のプリント 75.0%、学生の発表資料 42.9%、提出したレポートに対するコメント 53.6%でした。希望では、授業のプリント 78.6%、学生の発表資料 78.6%、提出したレポートに対するコメント 71.4%で、いずれもデータを希望する割合が、現状よりも高くなっていました。ただし、授業のプリントについては現状・希望ともに2位が「点字」(現状 53.6%、希望 53.6%) でした。これは授業中に読むプリントは点字のほうが扱いやすいからと考えられます。

墨字使用学生では、現状・希望ともに「拡大コピー」か「普通文字」の割合が最も高い

結果となりました。現状では、授業のプリントで「拡大コピー」92.3%、学生の発表資料で「普通文字」84.6%、提出したレポートに対するコメントで「拡大コピー」84.6%でした。希望では、授業のプリントで「拡大コピー」76.9%、学生の発表資料で「拡大コピー」61.5%・「普通文字」61.5%、レポートに対するコメントで「普通文字」53.8%でした。教員が準備する資料については拡大コピーで用意されることがきわめて多いことがわかりました。一方、学生の発表資料については拡大コピーでの提供（現状 38.5%）は十分されていないことがわかりました。また、「オリジナルの電子データ」の希望は授業のプリントで 38.5%、学生の発表資料で 23.1%でした。したがって、オリジナルの電子データを希望する学生もある程度いることがわかりました。

表3-3-1 教員・他の学生からの配布資料（点字）

		点字	オリジナルの電子データ	web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
授業のプリント	現状	53.6%	75.0%	7.1%	39.3%	28.6%	3.6%	0.0%	3.6%	14.3%
	希望	53.6%	78.6%	0.0%	3.6%	10.7%	3.6%	0.0%	3.6%	
学生の発表資料	現状	7.1%	42.9%	3.6%	7.1%	21.4%	0.0%	0.0%	3.6%	28.6%
	希望	14.3%	78.6%	0.0%	0.0%	17.9%	0.0%	0.0%	0.0%	
提出したレポートに対するコメント	現状	7.1%	53.6%	0.0%	0.0%	32.1%	0.0%	0.0%	3.6%	10.7%
	希望	10.7%	71.4%	0.0%	0.0%	28.6%	0.0%	0.0%	0.0%	

表3-3-2 教員・他の学生からの配布資料（墨字）

		点字	オリジナルの電子データ	web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
授業のプリント	現状	0.0%	15.4%	15.4%	0.0%	0.0%	0.0%	92.3%	76.9%	0.0%
	希望	0.0%	38.5%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	76.9%	46.2%	
学生の発表資料	現状	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	38.5%	84.6%	0.0%
	希望	0.0%	23.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	61.5%	61.5%	
提出したレポートに対するコメント	現状	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	15.4%	0.0%	84.6%	0.0%	0.0%
	希望	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	38.5%	53.8%	

（４）事務連絡等

「掲示板等による諸連絡」、「成績の通知」、「履修登録や履修状況の確認」について質問しました。表 3-4-1 に点字使用学生、表 3-4-2 に墨字使用学生の結果を示します。

点字使用学生では、掲示板等による諸連絡（現状 42.9%、希望 57.1%）と履修登録や履修状況の確認（現状 53.6%、希望 57.1%）において、現状・希望ともに「web」の割合が 1 位でした。成績の通知では現状は「対面朗読」（35.7%）、希望は「オリジナルの電子データ」（42.9%）の割合が 1 位でした。いずれの項目でも基本的には、希望は web やオリジナルの電子データであり、独力で読める形態を希望していることがわかりました。

墨字使用学生では、掲示板等による諸連絡（現状 46.9%、希望 69.2%）と履修登録や履修状況の確認（現状 61.5%、希望 53.8%）で、現状・希望ともに「web」の割合が 1 位でし

た。成績の通知については、現状・希望ともに「普通文字」（現状 100%、希望 69.2%）の割合が1位でした。掲示板については、webの希望がかなり高い結果となりましたが、これは、はり出された掲示を確認するのが困難なためと考えられます。その他、掲示された印刷物のコピーを職員がファイリングし、学生本人が事務室で閲覧する方法を用いているケースもありました。履修登録や履修状況の確認・成績の通知については、webか普通文字で対応できていることがわかりました。

表3-4-1 事務連絡等（点字）

		点字	オリジナルの電子データ	web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
掲示板等による諸連絡	現状	0.0%	32.1%	42.9%	0.0%	39.3%	0.0%	0.0%	3.6%	7.1%
	希望	3.6%	50.0%	57.1%	0.0%	17.9%	0.0%	0.0%	3.6%	
成績の通知	現状	10.7%	7.1%	25.0%	3.6%	35.7%	0.0%	0.0%	0.0%	10.7%
	希望	25.0%	42.9%	35.7%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	3.6%	
履修登録や履修状況の確認	現状	0.0%	7.1%	53.6%	0.0%	42.9%	0.0%	0.0%	0.0%	3.6%
	希望	17.9%	28.6%	57.1%	0.0%	14.3%	3.6%	0.0%	0.0%	

表3-4-2 事務連絡等（墨字）

		点字	オリジナルの電子データ	web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
掲示板等による諸連絡	現状	0.0%	30.8%	46.2%	0.0%	15.4%	0.0%	0.0%	23.1%	7.7%
	希望	0.0%	23.1%	69.2%	0.0%	7.7%	7.7%	30.8%	23.1%	
成績の通知	現状	0.0%	0.0%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%
	希望	0.0%	0.0%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	23.1%	69.2%	
履修登録や履修状況の確認	現状	0.0%	7.7%	61.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	38.5%	0.0%
	希望	0.0%	7.7%	53.8%	7.7%	0.0%	0.0%	23.1%	30.8%	

全体を通じて点字使用学生は、現状では点字、web、オリジナルの電子データ、対面朗読等を使い分けていました。一方希望を見ると、点字、web、オリジナルの電子データが高く、対面朗読はあまり高くないことから、独力で読める形態を希望していることがわかります。

教科書や授業のプリント等では、基本的に点字かオリジナルの電子データでの資料の入手を希望しており、専門的な学習をする上では、音声よりも文字のほうが扱いやすいということになります。学生生活上必要な規則やシラバス等の冊子と事務連絡等では、点字の割合は低くなり、webかオリジナルの電子データを希望している割合が高くなっていました。

一方、点字使用学生が入手できていない割合が高かった資料としては、学生便覧（39.3%）、他の学生の発表資料（28.6%）があり、通常配布される資料のすべてを入手できているわけではありませんでした。また、学生が希望する形式での資料の提供が十分ではない場合も多く、今後解決すべき課題と言えます。

墨字使用学生は掲示板を除いて、基本的に普通文字や拡大コピーで対応できていることがわかりました。

4. 資料の提出

「授業内に作成し提出する資料」、「授業以外で作成し提出する資料」、「事務手続き」の資料の提出形態について、現状と希望を質問しました。

提出形態については、以下の 7 形態からあてはまるものをすべて選んでもらいました。それぞれの項目について、各形態を利用している割合及び、希望している割合を、点字使用学生・墨字使用学生別に表に示します。なお、表の網掛け部分は、利用している、または希望している割合が最も多かった資料の提出形態です。

- ・ 点字
- ・ 自筆の墨字
- ・ パソコンで作成し印刷
- ・ 電子データ（パソコンで作成し電子メール等で提出）
- ・ 代筆
- ・ web 入力
- ・ 手続き専用端末の利用

(1) 授業中に作成し提出する資料

「小テスト」、「出席カード」、「授業内のコメントカード」について質問しました。表 4-1-1 に点字使用学生、表 4-1-2 に墨字使用学生の結果を示します。

点字使用学生では、「電子データ」の割合が小テストで現状 64.3%、希望 67.9%、授業内のコメントカードで現状 64.3%、希望 67.9%と、現状・希望ともに最も高い結果となりました。出席カードについては、「代筆」の割合が現状 96.4%、希望 50.0%で、ともに 1 位でした。

小テスト・授業内のコメントカードのように、ある程度考えて解答や意見を書くものは、現状・希望ともに「電子データ」の割合が高くなっていました。ただし、希望を見ると「点字」の割合も、小テストで 42.9%、コメントカードで 21.4%ありました。

出席カードのように名前を書く程度のもものでは、現状・希望ともに「代筆」の割合が最も高くなっていました。しかし、代筆を希望する割合は現状よりかなり低く、その分「点字」(25.0%)と「電子データ」(17.9%)の割合が高くなっていました。

墨字使用学生はどの提出物においても「自筆」が最も高く、現状 100%、希望 92.3%でした。したがって、自筆で対応できていると考えることができます。

表4-1-1 授業中に作成し提出する資料（点字）

		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	web入力	専用端末
小テスト	現状	14.3%	3.6%	28.6%	64.3%	21.4%	0.0%	0.0%
	希望	42.9%	0.0%	10.7%	67.9%	3.6%	0.0%	0.0%
出席カード	現状	0.0%	7.1%	3.6%	25.0%	96.4%	0.0%	0.0%
	希望	25.0%	3.6%	0.0%	17.9%	50.0%	3.6%	0.0%
授業内のコメントカード	現状	3.6%	3.6%	14.3%	64.3%	60.7%	0.0%	0.0%
	希望	21.4%	3.6%	7.1%	67.9%	25.0%	0.0%	0.0%

表4-1-2 授業中に作成し提出する資料（墨字）

		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	web入力	専用端末
小テスト	現状	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	希望	0.0%	92.3%	7.7%	15.4%	0.0%	0.0%	0.0%
出席カード	現状	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	7.7%
	希望	0.0%	92.3%	0.0%	0.0%	7.7%	7.7%	7.7%
授業内のコメントカード	現状	0.0%	100.0%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	希望	0.0%	92.3%	15.4%	7.7%	0.0%	7.7%	0.0%

（２）授業以外で作成し提出する資料

「レポート」「発表資料」「定期試験」について質問しました。表 4-2-1 に点字使用学生、表 4-2-2 に墨字使用学生の結果を示します。

点字使用学生では、レポートについては、現状で最も割合が高かったのは「パソコンで作成し印刷」（82.1%）、希望で最も割合が高かったのは「電子データ」（85.7%）でした。現状で1位であった「パソコンで作成し印刷」は、希望では50%と低くなっていました。点字使用学生は墨字で印刷したものを自分では確認できないため、自分で確認できる電子データを希望していると考えられます。発表資料については「パソコンで作成し印刷」が現状（67.9%）・希望（60.7%）ともに1位、「電子データ」（現状39.3%、希望46.4%）が2位でした。発表資料は他の学生にも配付しなければいけないため、本来は電子データでの提出を希望していたとしても、努力して印刷していると考えられます。

定期試験については、現状では「電子データ」（60.7%）が1位、希望では「点字」（64.3%）が1位でした。「電子データ」の希望は35.7%で2位でした。出題内容によって点字か電子データを希望していると考えられます。

墨字使用学生は、現状・希望ともに「パソコンで作成し印刷」が1位だったのはレポート（現状76.9%、希望76.9%）、発表資料（現状76.9%、希望84.6%）、「自筆」が1位だったのは定期試験（現状100%、希望84.6%）でした。

表4-2-1 授業以外で作成し提出する資料（点字）

		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	web入力	専用端末
レポート	現状	10.7%	0.0%	82.1%	78.6%	3.6%	7.1%	0.0%
	希望	10.7%	0.0%	50.0%	85.7%	3.6%	0.0%	0.0%
発表資料	現状	0.0%	0.0%	67.9%	39.3%	0.0%	3.6%	0.0%
	希望	7.1%	0.0%	60.7%	46.4%	0.0%	0.0%	0.0%
定期試験	現状	53.6%	10.7%	35.7%	60.7%	3.6%	0.0%	0.0%
	希望	64.3%	7.1%	21.4%	35.7%	3.6%	0.0%	0.0%

表4-2-2 授業以外で作成し提出する資料（墨字）

		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	web入力	専用端末
レポート	現状	0.0%	53.8%	76.9%	30.8%	0.0%	7.7%	0.0%
	希望	0.0%	23.1%	76.9%	23.1%	0.0%	0.0%	0.0%
発表資料	現状	0.0%	46.2%	76.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	希望	0.0%	38.5%	84.6%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%
定期試験	現状	0.0%	100.0%	7.7%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%
	希望	0.0%	84.6%	23.1%	15.4%	0.0%	0.0%	0.0%

（3）事務手続き

「履修登録」、「証明書等の発行手続き」、「その他の事務手続き」について質問しました。

表 4-3-1 に点字使用学生、表 4-3-2 に墨字使用学生の結果を示します。

点字使用学生では、履修登録は「web 入力」（現状 57.1%、希望 60.7%）、証明書等の発行手続きは「専用端末の利用」（現状 39.3%、希望 39.3%）、その他の事務手続きは「代筆」（現状 78.6%、希望 46.6%）が、現状・希望ともに 1 位でした。web や専用端末は、web のデザインが視覚障害者にも使いやすくなっていなかったり、タッチパネル式の専用端末なので自力では操作できなかつたりするため、友人や職員のサポートを受けながら利用しているという意見が多数ありました。そのため、電子メールを送るなど電子データで依頼し手続きをしたいという意見もありました。

墨字使用学生は、履修登録は「web 入力」（現状 76.9%、希望 76.9%）、証明書等の発行手続きは「自筆」（現状 46.2%、希望 53.8%）、その他の事務手続きも「自筆」（現状 92.3%、希望 92.3%）が 1 位でした。したがって、指定された手続き方法に対応できている学生がほとんどでした。

表4-3-1 事務手続き（点字）

		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	web入力	専用端末
履修登録	現状	0.0%	0.0%	0.0%	3.6%	25.0%	57.1%	0.0%
	希望	0.0%	0.0%	3.6%	25.0%	7.1%	60.7%	3.6%
証明書等の発行手続き	現状	0.0%	3.6%	0.0%	0.0%	25.0%	3.6%	39.3%
	希望	3.6%	0.0%	3.6%	17.9%	28.6%	25.0%	39.3%
その他の事務手続き	現状	3.6%	3.6%	3.6%	10.7%	78.6%	7.1%	3.6%
	希望	3.6%	0.0%	3.6%	35.7%	46.4%	17.9%	14.3%

表4-3-2 事務手続き（墨字）

		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	web入力	専用端末
履修登録	現状	0.0%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	76.9%	7.7%
	希望	0.0%	23.1%	23.1%	7.7%	0.0%	76.9%	7.7%
証明書等の発行手続き	現状	0.0%	46.2%	7.7%	0.0%	7.7%	7.7%	30.8%
	希望	0.0%	53.8%	15.4%	7.7%	15.4%	7.7%	46.2%
その他の事務手続き	現状	0.0%	92.3%	15.4%	0.0%	7.7%	7.7%	0.0%
	希望	0.0%	92.3%	15.4%	7.7%	7.7%	7.7%	7.7%

全体を通して見ると、点字使用学生は提出する資料によって、点字、電子データ、パソコンで作成し印刷、web入力、代筆などのさまざまな手段を使い分けていることがわかりました。定期試験については解答を点字で提出することを希望する割合が高くなっていますが、その他の資料については、web入力をしたり電子データを作成して、独力で提出している学生が多かったです。このように電子媒体で資料を提出することで、教職員や他の学生とのやりとりがしやすくなっているようです。

墨字使用学生は多くの場合自筆やパソコンで作成し印刷、web入力で対応できていますが、電子データを希望する学生もいました。

5. 講義等

講義における配慮や支援として、「座席位置の配慮」、「講義の録音の許可」、「板書の読み上げ」、「スライド・ビデオの字幕・映像等の説明」、「TA（ティーチング・アシスタント）の配置」、「ノートテイカーの配置」、「他の学生への周知」、「授業担当教員への周知」の8項目について質問しました。各項目における現在の状況について、「まったくしてもらっていない」を0点、「たまにしてもらっている」を1点、「時々してもらっている」を2点、「いつもしてもらっている」を3点、希望については、「まったく必要ない」を0点、「たまに配慮してほしい」を1点、「時々配慮してほしい」を2点、「いつも配慮してほしい」を3点と得点化し、項目ごとの合計点を、点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点(3点)で割った値を求めました。その結果を図5-1(点字)、図5-2(墨字)に示します。

また、視覚障害があるために、授業内容が変更されたり、履修をあきらめざるをえなかったりしたケースについて自由に記述してもらいました。

(1) 座席位置の配慮・録音の許可

点字使用学生では、「座席位置の配慮」は現状 0.12、希望 0.18、「講義の録音の許可」は現状 0.17、希望 0.30 でした。墨字使用学生では、「座席位置の配慮」は現状 0.36、希望 0.38、「講義の録音の許可」は現状・希望ともに 0.18 でした。

座席位置の配慮については、点字使用学生と墨字使用学生を比較すると、墨字使用学生のほうが現状も希望も高い値でした。墨字使用学生は明るさによって見え方に影響を受けたり、黒板等の見えやすい位置があるため、座席位置の配慮が必要な場合があると考えられます。一方、点字使用学生はそのような影響をあまり受けないため、希望の値が低いと思われます。

講義の録音の許可については、点字使用学生も墨字使用学生も現状は低い値でし

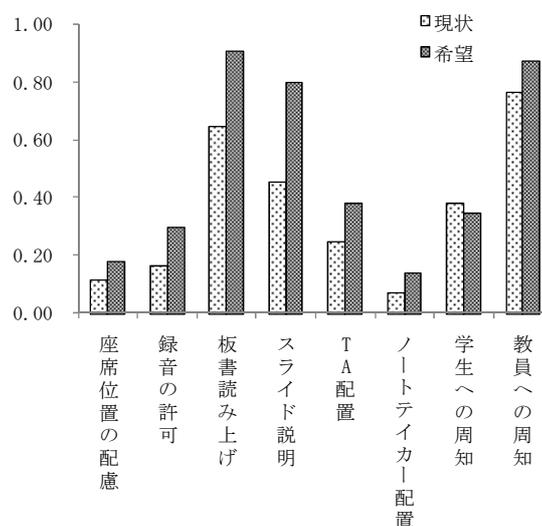


図5-1 講義における配慮や支援 (点字)

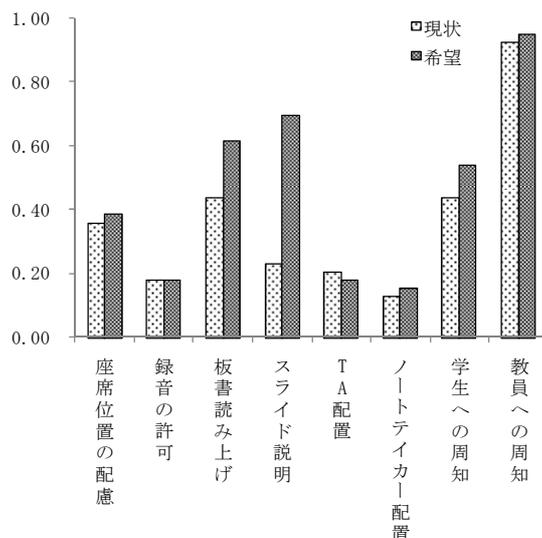


図5-2 講義における配慮や支援 (墨字)

た。点字使用学生の希望の値が現状の値よりかなり高いのは、講義のスピードが速い場合にノートがとりきれないため、録音することがあるからだと考えられます。墨字使用学生の場合はそのようなニーズが点字使用学生ほどは高くない結果となりました。

(2) 板書の読み上げ・スライド等の説明

点字使用学生では、「板書の読み上げ」は現状 0.64、希望 0.90、「スライド・ビデオの字幕・映像等の説明」は現状 0.45、希望 0.80 でした。墨字使用学生では、「板書の読み上げ」は現状 0.44、希望 0.62、「スライド・ビデオの字幕・映像等の説明」は現状 0.23、希望 0.69 でした。

点字使用学生は板書やスライド等の視覚情報を言葉で説明してもらいたいという希望が非常に強いにもかかわらず、現状ではその希望が十分に満たされていないことがわかりました。このことは、点字使用学生ほどではないまでも、墨字使用学生についても同様でした。近年、講義中のビジュアルな情報提示方法がますます増えているため、視覚情報を補う支援の検討が不可欠であると考えられます。

(3) TA (ティーチング・アシスタント)・ノートテイカーの配置

点字使用学生では、「TA の配置」は現状 0.25、希望 0.38、「ノートテイカーの配置」は現状 0.07、希望 0.14 でした。墨字使用学生では「TA の配置」は現状 0.21、希望 0.18、「ノートテイカーの配置」は現状 0.13、希望 0.15 でした。

TA とは、大学の制度として授業に関連して学生または教職員が視覚障害学生に対して個別の必要な支援を行うことです。特に情報処理や体育実技、ビデオを用いた授業では有効と考えられます。結果を見ると、すべての授業で必要というわけではありませんが、授業の特性に応じて、授業者だけでは支援しきれない部分について TA が配置されていると思われれます。

ノートテイカーとは、視覚障害学生に代わって板書などの視覚情報をノートに書き取る支援者のことです。結果を見ると、ノートテイカーの配置の希望はそれほど多くありませんでした。これは、視覚障害学生は自分で講義を聞きながらノートを取ることができるからだと考えられます。また、支援者に書き取ってもらったノートを読んで理解するためにかえって時間を費やすことになるので、できる限り授業中に内容を理解しようと努めていると思われれます。

(4) 他の学生・授業担当教員への周知

点字使用学生では、「他の学生への周知」は現状 0.38、希望 0.35、「授業担当教員への周知」は現状 0.76、希望は 0.87 でした。墨字使用学生では、「他の学生への周知」は現状 0.44、希望 0.54、「授業担当教員への周知」は現状 0.92、希望 0.95 でした。

ここで言う周知とは、視覚に障害のある学生の存在を知らせることと、必要な配慮につ

いて文書等で伝えることです。

「他の学生への周知」については、点字使用学生と墨字使用学生を比較すると、墨字使用学生のほうが現状も希望も高い値となりました。これは、点字使用学生は白杖を持っていたり点字を使っているということで、説明しなくても視覚障害があることが明らかである一方、墨字使用学生は周りからは障害があることが理解されにくいからと考えられます。

「授業担当教員への周知」については、点字使用学生・墨字使用学生ともに現状も希望も高い値となりました。大学生活の中心である学習を進める上で、教員の視覚障害に対する理解が不可欠であることを示しています。また、視覚障害学生が個別に必要な支援を教員に依頼する場合も、大学から公式な通達が各教員になされていることでスムーズに話を進められるという側面もあると思われます。

(5) 授業内容の変更

情報処理や体育実技等の実習や実技について、内容を変更した授業について質問しました。

(ア) 情報処理

点字使用学生では、通常の情報処理実習の授業とは異なる内容の授業を受けていた学生が 28 名中 20 名いました。そのうち 8 名が、通常のクラスを履修しながらも、別室で画面読み上げソフトなどを用いて視覚障害に配慮した個別指導を受けていました。また、8 名が通常のクラスの中でティーチング・アシスタントから個別に支援を受けていました。その他 3 名が、障害学生用に開講されているクラスを受講していました。1 名が授業には参加せず、課題を提出することで単位認定を受けていました。

墨字使用学生で通常の情報処理実習の授業とは異なる内容の授業を受けていた学生は 13 名中 2 名でした。そのうち 1 名が授業には参加せず、課題を提出することで単位認定を受けていました。もう 1 名は画面表示設定を変更し文字を拡大するなどして対応していました。

特に点字使用学生の場合、画面が見えずマウス操作もできないため、画面読み上げソフトや点字ディスプレイの利用、キーボードのみを用いた操作をしなければなりません。したがって、通常の指導方法ではスキルアップが望めないため、視覚障害者のパソコン利用に関して専門知識をもった指導者が必要となります。ティーチング・アシスタントだけの配置では画面の情報を伝える程度に終わり、実際の操作方法、画面の構造や概念を系統的に指導することは困難だと考えられます。視覚障害学生が高度な情報処理技術を身につけることは学習効率の向上や就職の機会拡大につながるため、いっそうの充実が望まれます。

(イ) 体育実技

点字使用学生では、通常の体育実技の授業とは異なる内容の授業を受けていた学生が 13 名いました。そのうち 4 名が通常のクラスの中でティーチング・アシスタントから個別に支援を受けていました。また 3 名が障害学生用に開講されているクラスを受講していました。3 名がアダプティブ・スポーツ（使用する用具やルールなどを工夫することにより、障害の有無や程度にかかわらず参加できるようにしたスポーツ）を行うクラスを受講していました。1 名は通常の卓球クラスで他の学生の協力も得ながらサウンドテーブルテニス（盲人卓球）を行っていました。1 名は、視覚に障害があっても参加可能な種目を優先的に選択させてもらっていました。1 名は授業には参加せず、レポートを提出することで単位認定を受けていました。

墨字使用学生では、通常の体育実技の授業とは異なる内容の授業を受けていた学生が 5 名いました。そのうち 3 名が通常のクラスを受講しながら、ウェイトトレーニングなど与えられた個別の課題を行っていました。また 2 名が障害学生用に開講されているクラスを受講していました。

視覚に障害があっても生涯にわたりさまざまなスポーツに参加することが可能であり、スポーツを通しての健康の維持や仲間作り、社会参加の態度を身につけることは重要です。対象者の中には球技に参加できないため、一年間ひとりでウェイトトレーニングだけを行っていた学生も複数いました。視覚障害学生の体育実技への参加についてはさらに検討する必要があります。

(ウ) その他

校内の実験や実習では、ティーチング・アシスタントが配置され視覚情報の補足を行ったり（点字 2 名）、非視覚的な方法による実験への変更（点字 2 名）などが行われた例がありました。

学外の実習やフィールドワークでは、ティーチング・アシスタントの同行（点字 1 名）、実習先の優先的な斡旋（点字 2 名）、フィールドワークや見学の際の歩行介助（点字 3 名）などが行われた例がありました。

(6) あきらめた授業

視覚障害に関連して授業をあきらめたことがあるかについて質問しました。

(ア) 情報処理

情報処理の実習をあきらめた理由としては次のような例がありました。

- ・視覚障害者のパソコン利用に関する専門知識をもった講師の授業が開講されていなかった。
- ・情報処理実習で利用する教室のパソコンに画面読み上げソフトや画面拡大ソフトをインストールしてもらえなかった。

(イ) 体育実技

体育実技の授業をあきらめた理由としては次のような例がありました。

- ・アダプティブ・スポーツの授業はあったが、視覚障害者向けスポーツの取り扱いがなく、視力がないと難しいと判断しあきらめた。
- ・球技が多く、履修できなかった。

(ウ) その他

その他の授業をあきらめた理由としては次のような例がありました。

- ・第二外国語は教科書の点訳のめどがたたなかった。
- ・音声学や音韻論など、記号を多用する授業で教材の準備が困難だった。
- ・教養の「美術史」と「美術実習」は写真や絵が多く、十分説明されない可能性があったためあきらめた。
- ・入りたいゼミがあったが、視覚障害に対する教員の理解が得られず、「一緒に活動できない」という理由で断られた。
- ・在籍大学で標準的に使用されている統計ソフトを、画面読み上げソフトでは使いこなせないという理由であきらめた。

古文書を読むことや顕微鏡で観察するといったことがその授業の目的で、視覚に障害があるために実質的な学習ができない場合もあります。しかし、学習の目標に対応して指導方法や内容の取り扱いを柔軟に配慮すれば履修が可能になることも多くあります。したがって、指導方法や授業内容の検討にあたっては、視覚障害学生や視覚障害教育の専門機関（学生の出身盲学校など）と十分連携する必要があります。

6. 定期試験

「時間延長」、「別室受験」、「出題方法の配慮（点字・拡大文字等での出題）」、「解答方法の配慮（点字解答・解答用紙の変更・パソコン解答など）」、「レポートへの変更」について質問しました。

それぞれの項目における現在の状況について、「まったくしてもらっていない」を0点、「たまにもらっている」を1点、「時々もらっている」を2点、「いつももらっている」を3点、希望について、「まったく必要ない」を0点、「たまに配慮してほしい」を1点、「時々配慮してほしい」を2点、「いつも配慮してほしい」を3点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点（3点）で割った値を求めました。その結果を図6-1-1（点字）、図6-1-2（墨字）に示します。

（1）時間延長・別室受験

点字使用学生では、「時間延長」は現状0.85、希望0.86で、実際の延長時間は現状が平均1.47倍、希望は平均1.51倍でした（表6-1-1）。

「別室受験」は現状0.73、希望0.74でした。

墨字使用学生では、「時間延長」は現状0.59、希望0.64で、実際の延長時間は現状が平均1.3倍、希望が平均1.31倍でした（表6-1-2）。

「別室受験」は現状0.41、希望0.49でした。

時間延長については、点字使用学生は入学試験においても通常1.5倍の時間延長が認められており、定期試験でも現状・希望ともに高い値を示しています。墨字使用学生は点字使用学生ほどではありませんが、延長のニーズが高いことがわかりました。また、点字使用学生の時間延長1.5倍、墨字使用学生の時間延長1.3倍は、ある程度定着していました。別室受験については、時間延長とも関連して、点字使用学生はニーズが高く、墨字使用学生のニーズもある程度あることがわかりました。

時間延長・別室受験のいずれについても点字使用学生の値が墨字使用学生より高いのは、点字使用学生の解答する手段が点字・パソコン・口頭と多岐にわたり、墨字

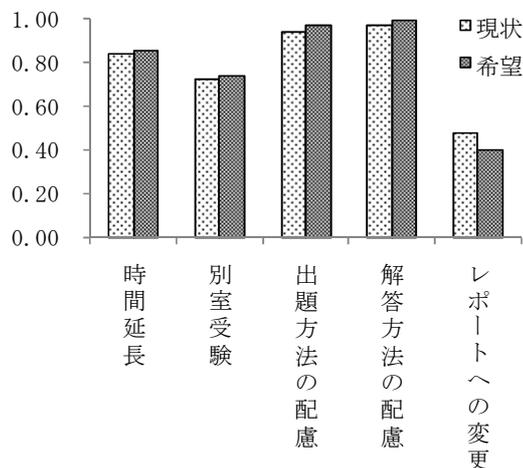


図6-1-1 定期試験に関する配慮(点字)

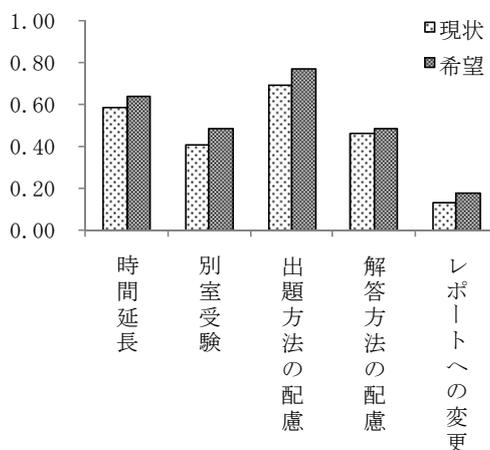


図6-1-2 定期試験に関する配慮(墨字)

使用学生のように一般の受験生と同じ方法で受けることができないためだと考えられます。

表 6-1-1 定期試験における時間延長の倍率と人数（点字）

延長時間(倍)		1	1.25	1.5	1.75	2	無回答	合計	平均(倍)
点字	現状	2	1	24	0	1	0	28	1.47
	希望	0	1	23	2	0	2	28	1.51

表 6-1-2 定期試験における時間延長の倍率と人数（墨字）

延長時間(倍)		1	1.25	1.3	1.5	無回答	合計	平均(倍)
墨字	現状	2	1	7	3	0	13	1.3
	希望	2	1	5	4	1	13	1.31

(2) 試験方法の配慮

(ア) 出題方法

点字使用学生では「出題方法の配慮」は現状が 0.94、希望は 0.98 でした。配慮の具体的内容をすべて答えてもらった結果を図 6-2-1 に示します。出題方法の現状は高い順に「点字」(75.0%)、「口頭」(39.3%)、「データ」(25.0%) でした。希望は高い順に「点字」(85.7%)、「データ」(32.1%)、「口頭」(7.1%) でした。

墨字使用学生では「出題方法の配慮」は現状が 0.69、希望は 0.77 でした。配慮の具体的内容をすべて答えてもらった結果を図 6-2-2 に示します。現状は高い順に「問題用紙・文字の拡大」(69.2%)、「フォントの変更」(46.2%)、「データ」(46.2%) でした。希望は高い順に「問題用紙・文字の拡大」(61.5%)、「フォントの変更」(30.8%)、「データ」(15.4%) でした。

点字使用学生は通常の問題用紙を読んで解答できないため、必ず配慮が必要であり、結果にもそのことが示されています。墨字使用学生についても文字サイズやフォントに配慮した問題用紙が必要なため、出題方法への配慮を希望していると考えられます。

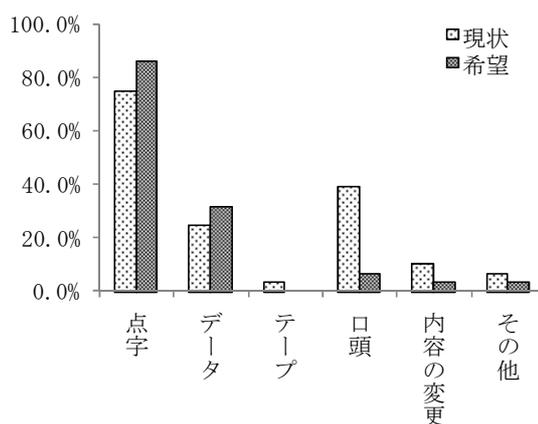


図6-2-1 出題方法の配慮（点字）

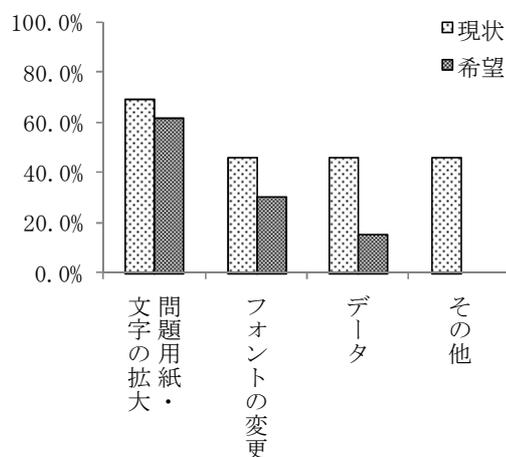


図6-2-2 出題方法の配慮（墨字）

出題方法の配慮を詳しく見ると、点字使用学生では点字またはデータでの出題を希望する割合が、現状よりも高くなっています。一方、口頭での出題は現状ではある程度高い割合になってはいますが、希望はほとんどありませんでした。したがって、基本的には点字かデータでの出題を希望していることがわかりました。ただし、点字とデータを比較すると、データよりも点字を希望する割合がかなり高くなっていました。

墨字使用学生では、現状も希望も、問題用紙・文字の拡大とフォントの変更の割合が、ある程度高くなっていました。一方、データでの出題は現状ではある程度高い割合になってはいますが、希望はさほど高くありませんでした。したがって、基本的には適切な文字サイズによる紙媒体での出題を希望していることがわかりました。

(イ) 解答方法の配慮

点字使用学生では「解答方法の配慮」は現状が0.98、希望は1.00でした。配慮の具体的な内容をすべて答えてもらった結果を図6-3-1に示します。現状は高い順に「点字」(64.3%)、「データ」(53.6%)、「口頭」(32.1%)でした。希望は高い順に「データ」(78.6%)、「点字」(57.1%)、「口頭」(10.7%)でした。

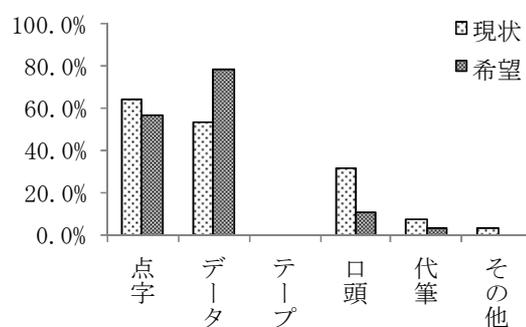


図6-3-1 解答方法の配慮 (点字)

墨字使用学生では「解答方法の配慮」は現状が0.46、希望は0.49でした。配慮の具体的な内容をすべて答えてもらった結果を図6-3-2に示します。現状は高い順に「解答用紙の拡大」(30.8%)、「マークシート方式の変更」(30.8%)、「データ」(15.4%)等の配慮がありました。希望は高い順に「解答用紙の拡大」(30.8%)、「マークシート方式の変更」(23.1%)、「解答用紙の変更」(15.4%)、「データ」(7.7%)でした。なお、マークシートは狭い範囲をきれいに塗りつぶす必要があるため、弱視学生にとっては困難です。したがって、マークしたい部分をチェックし、後で担当者が塗りつぶす方法、学生本人が別紙に問題番号と選択肢の記号を文字で記入する方法などの配慮が行われています。また、解答欄を探したり指定された欄に書き込むことが困難な場合は、自由に記述できる罫紙

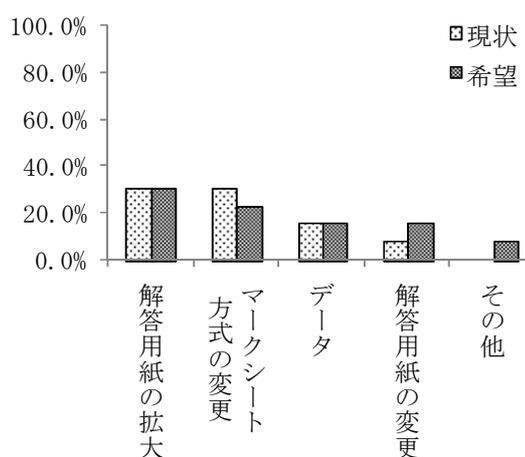


図6-3-2 解答方法の配慮 (墨字)

などの解答用紙に変更するなどの配慮が行われています。

解答方法の配慮を詳しく見ると、点字使用学生では現状・希望ともに点字またはデータでの解答を希望する割合が高くなっています。一方、口頭での解答は現状ではある程度高い割合になっていますが、希望はほとんどありませんでした。したがって、基本的には点字かデータでの解答を希望していることがわかりました。ただしデータでの解答については、点字使用学生の多くが、高校までの教育で漢字を実際には使用せずに点字で読み書きをしてきているため、単なる漢字変換のミスに加えて、漢字への不慣れにより使用する文字を間違えることもあります。その点を考慮して採点上の配慮をすることが必要となります。

墨字使用学生は視力や視野等の視機能が個人によってさまざまであるため、一律に適用できる方法はなく、各学生の見え方に合わせた配慮が求められていることがわかりました。

(3) レポートへの変更

「レポートへの変更」は点字使用学生では現状が 0.48、希望は 0.40 でした。墨字使用学生では現状が 0.13、希望は 0.18 でした。

現状を見ると、点字使用学生に対する試験のレポートへの変更はある程度行われていますが、希望はあまり高くありません。これは、複数科目においてレポートへの変更が行われると、試験を受けるよりも負担が大きくなるため、あまり希望していないと考えられます。墨字使用学生は現状・希望ともに値が低く、出題方法・解答方法の配慮のみで対応できていると考えられます。

7. 図書館・参考資料室

図書館・参考資料室について、利用頻度、人的支援の利用状況、利用している支援の内容（現状）と希望について質問しました。

(1) 利用頻度

図書館・参考資料室を実際に利用している頻度を図7-1-1（点字）と図7-1-2（墨字）に示します。

点字使用学生では、「週に1回以上」28.6%、「月数回」17.9%、「学期に1回程度」42.8%、「利用しない」10.7%でした。「学期に1回程度」と「利用しない」を合わせた割合が半分を超えており、図書館の利用頻度がきわめて低いことがわかりました。大学の学習において図書館の利用は不可欠であるにもかかわらず利用頻度が少ない理由としては、利用できる資料が整っていないこと、十分な人的支援が受けられていないことなどが考えられます。また、学内の図書館を利用せずに、点字図書館やボランティアセンターなどで点字・録音図書を借りたり対面朗読を利用するなど、外部機関を利用していることも考えられます。いずれにしても図書館における支援のいっそうの充実が望まれます。

墨字使用学生では、「週に1回以上」76.9%、「月数回」15.4%、「学期に1回程度」0%、「利用しない」7.7%でした。週に1回以上利用している人の割合が高く、かなり利用していることがわかりました。

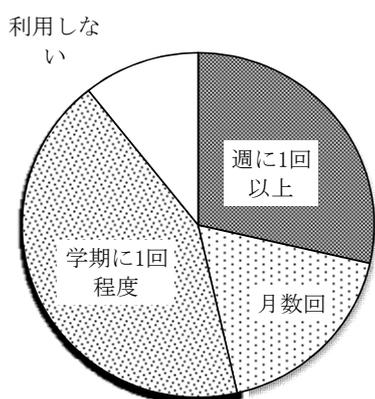


図7-1-1 図書館の利用頻度（点字）

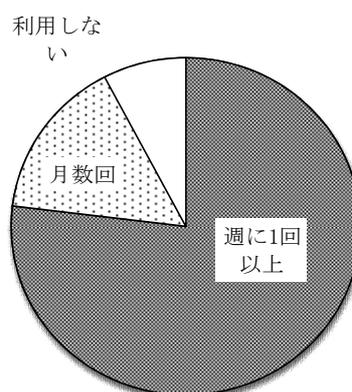


図7-1-2 図書館の利用頻度（墨字）

(2) 人的支援の利用状況

人的支援の利用状況を図 7-2-1 (点字) と図 7-2-2 (墨字) に示します。

点字使用学生では、「支援を受けている」78.6%、「支援を受けていない」21.4%でした。8割近くが支援を受けており、図書館を利用する場合には人的支援が必要であることがわかりました。

墨字使用学生では、「支援を受けている」30.8%、「支援を受けていない」69.2%でした。3割程度が支援を受けており、人によっては人的支援が必要であることがわかりました。

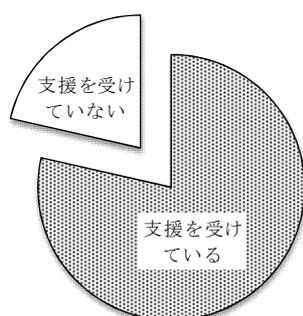


図7-2-1 図書館における人的支援の利用状況 (点字)

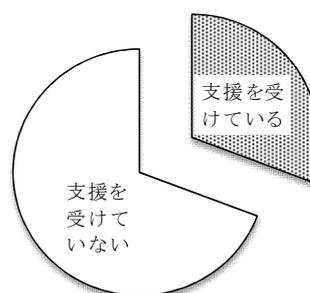


図7-2-2 図書館における人的支援の利用状況 (墨字)

(3) 利用している支援の内容 (現状) と希望

利用している支援の内容 (現状) を図 7-3-1 (点字) と図 7-3-2 (墨字) に、希望を図 7-4-1 (点字) と図 7-4-1 (墨字) に示します。

利用している人的支援の内容は、実際に支援を受けている点字使用学生 22 名では「検索の補助」13 名、「対面朗読」9 名、「コピーの補助」8 名でした。また、希望する支援内容について、全員 (28 名) に質問したところ、「対面朗読」17 名、「検索の補助」16 名、「コピーの補助」15 名でした。したがって、点字使用学生が図書館を利用する場合、これらの 3 項目の支援はいずれも必要と考えられます。

実際に支援を受けている墨字使用学生 4 名では、「検索の補助」2 名、「コピーの補助」1 名でした。また、希望する支援内容について、全員 (13 名) に質問したところ、「検索の補助」7 名、「コピーの補助」3 名、「対面朗読」1 名でした。「検索の補助」を希望する学生が約半数いたことから、普段墨字を使っていたとしても、たくさんある本の中から目的の本を探し出したり検索端末を利用することについては、負担感があることがわかりました。コピーの補助や対面朗読についてのニーズはあまり高くありませんでした。

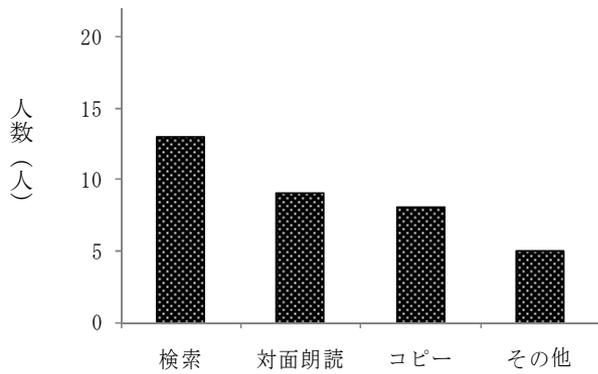


図7-3-1 図書館で利用している支援の内容（点字22名）

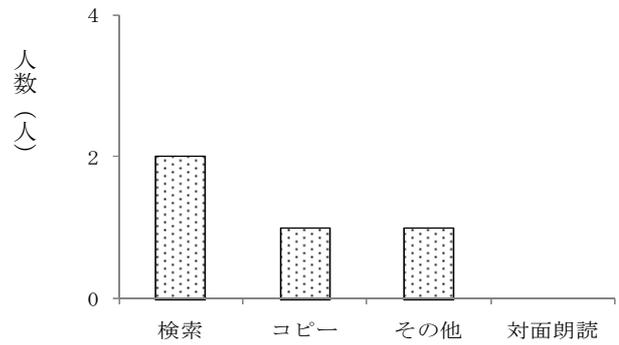


図7-3-2 図書館で利用している支援の内容（墨字4名）

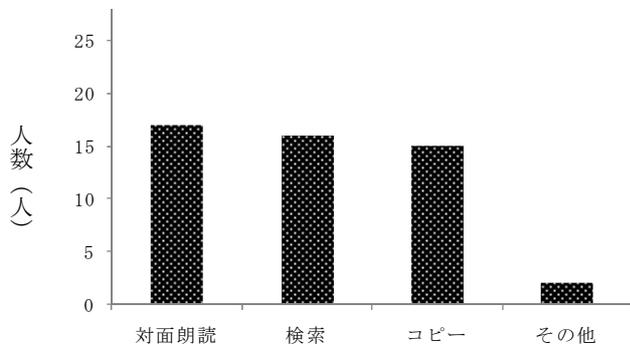


図7-4-1 図書館で希望する支援の内容（点字）

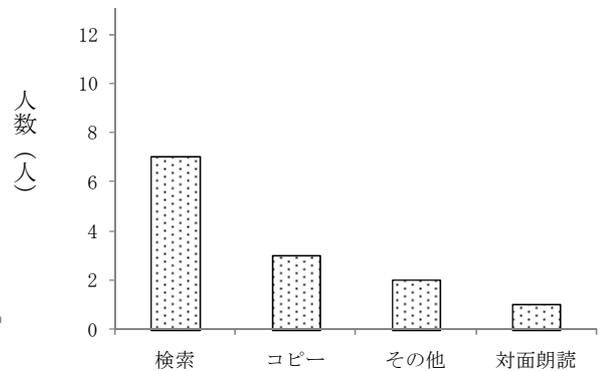


図7-4-2 図書館で希望する支援の内容（墨字）

「その他」として、希望する支援の内容を答えてもらったところ、「館内の移動を補助してほしい」（点字使用学生）、「メールのやりとりでも検索の補助をしてほしい」（点字使用学生）、「拡大読書器を設置してほしい」（墨字使用学生）、「検索端末を弱視者が見やすいように設定してほしい」（墨字使用学生）等の回答がありました。

8. 学習室・専用ロッカー

大学における視覚障害学生用学習室・専用ロッカーについて、現在の有無、必要な程度を質問しました。

現在の有無については「ない」を0点、「ある」を1点、必要な程度は「必要ない」を0点、「できたらほしい」を1点、「必ずほしい」を2点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点で割った値を求めました。その結果を図8-1（点字）と図8-2（墨字）に示します。

点字使用学生では、「学習室（専用学習室・学習スペース・対面朗読室などを含む）」については現状0.64、希望0.75、「専用ロッカー」については現状0.46、希望0.41でした。墨字使用学生では、「学習室」については現状0.31、希望0.35、「専用ロッカー」については現状0.15、希望0.31でした。

点字使用学生では専用ロッカーより学習室の希望の値が高くなっていました。これは、かさばる点字の教科書や資料を保管したり、対面朗読を受けたり、点字プリンタなど音の出る支援機器を使用したりするためと考えられます。点字使用学生が自立的に学習するためには、このような学習室が不可欠となります。しかし通常、高校時代までは専用学習室を利用する経験はほとんどないため、入学当初から効果的に活用できるよう指導する必要があります。

墨字使用学生では、点字使用学生と比べ希望の値はそれほど高くありませんでした。これは、図書館や空き教室でも携帯型拡大読書器や視覚補助具を活用して学習できるためと考えられます。しかし、墨字使用学生でもスペースを必要とする卓上型拡大読書器を使用する場合や、画面読み上げソフトを用いてパソコンを利用する場合等には専用学習室が必要となります。

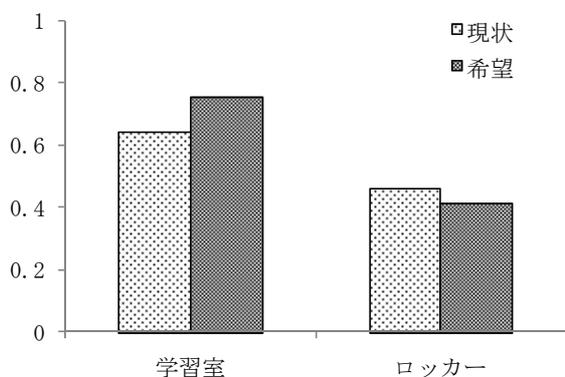


図8-1 学習室・専用ロッカーの整備状況と希望（点字）

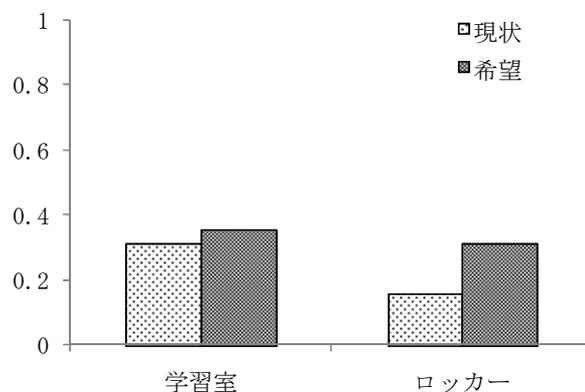


図8-2 学習室・専用ロッカーの整備状況と希望（墨字）

9. 支援機器・視覚補助具

15 項目の支援機器や視覚補助具について、現在活用している程度、大学の予算による準備の有無、大学の予算による準備を希望する程度について質問しました。

現在活用している程度については、それぞれの項目で、「まったく使っていない」を0点、「たまに使っている」を1点、「時々使っている」を2点、「いつも使っている」を3点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点（3点）で割った値を求めました。その結果を図9-1-1（点字）と図9-1-2（墨字）に示します。

大学の予算による準備の有無については、それぞれの項目で、大学の予算による準備が「ない」を0点、「ある」を1点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点（1点）で割った値を求めました。その結果を図9-2-1（点字）、図9-2-2（墨字）に示します。

大学の予算による準備を希望する程度については、それぞれの項目で「いらぬい」を0点、「できればほしい」を1点、「必ずほしい」を2点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点（2点）で割った値を求めました。その結果を図9-3-1（点字）と図9-3-2（墨字）に示します。なお、図中では、視覚障害者用のメールソフト、ワープロソフト、インターネットブラウザについては、それぞれ「専用メールソフト」、「専用ワープロソフト」、「専用ウェブブラウザ」と記載しています。

(1) 支援機器・視覚補助具活用の程度

点字使用学生では、携帯用点字端末(1.00)、画面読み上げソフト (0.98)、パソコン (0.95) が常に活用されていることがわかりました。次に一般ワープロソフト (0.77)、専用メールソフト (0.69)、専用ウェブブラウザ (0.64)、一般表計算ソフト (0.61) が活用されていました。続いて点字プリンタ (0.40)、専用ワープロソフト (0.35)、点字ディスプレイ (0.25) が活用されていました。

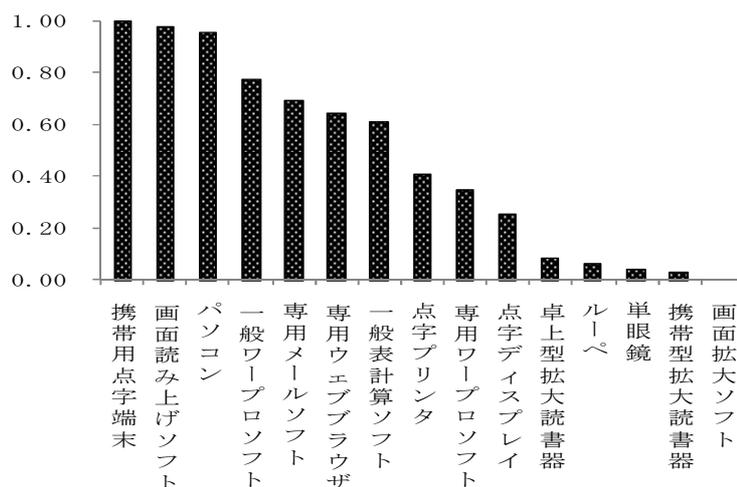


図9-1-1 支援機器・視覚補助具活用の程度 (点字)

墨字使用学生では、パソコン (0.85)、一般ワープロソフト (0.79)、単眼鏡 (0.69)、ルーペ (0.67)、一般表計算ソフト (0.67) がよく活用されていました。次に、画面拡大ソフト (0.33) も少し活用されていました。続いて、わずかではありますが携帯型拡大読書器 (0.13)、卓上型拡大読書器 (0.10)、画面読み上げソフト (0.08) も活用されていました。

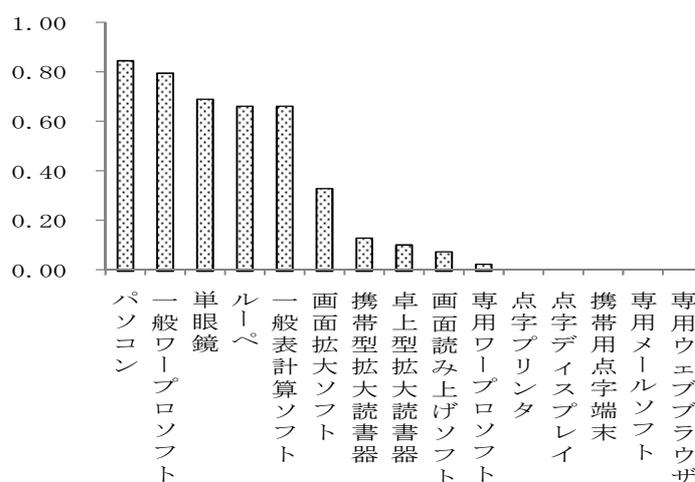


図9-1-2 支援機器・視覚補助具活用の程度 (墨字)

(2) 大学で準備されている支援機器・視覚補助具

点字使用学生では、ハードウェアとしてパソコン (0.93)、点字プリンタ (0.86)、ソフトウェアとして一般ワープロソフト (0.93)、一般表計算ソフト (0.93)、画面読み上げソフト (0.89)、専用ウェブブラウザ(0.71)がかなり準備されていました。点字ディスプレイ (0.43)、専用メールソフト (0.43) は半数近く準備されていました。ノートを書いたり、資料を読んだりするための携帯用点字端末 (0.18)、専用ワープロソフト (0.29) の準備の程度はあまり高くありませんでした。

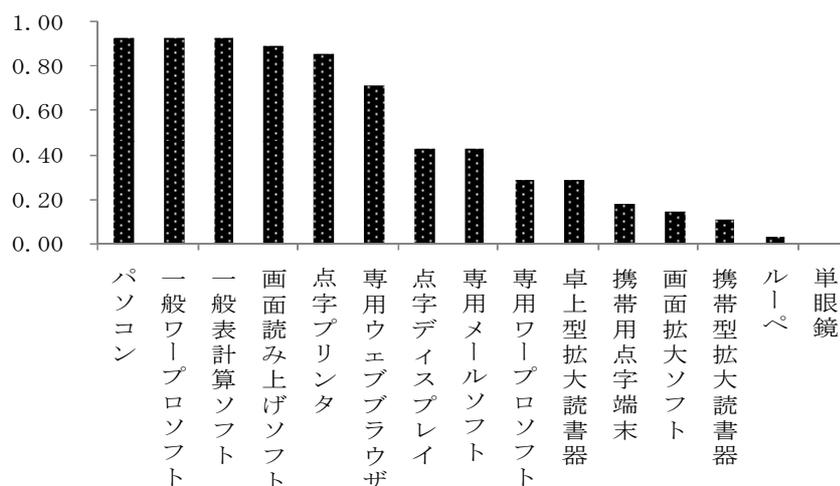


図9-2-1 大学で準備されている支援機器・視覚補助具 (点字)

墨字使用学生では、ハードウェアとしてパソコン (0.92)、ソフトウェアとして一般ワープロソフト (0.92)、一般表計算ソフト (0.92) の準備は進んでいました。画面読み上げソフト (0.54)、画面拡大ソフト (0.38) もある程度準備されていました。卓上型拡大読書器 (0.23)、ルーペ (0.15)、携帯型拡大読書器 (0.08)、単眼鏡 (0.08) の準備の程度はあまり高くありませんでした。

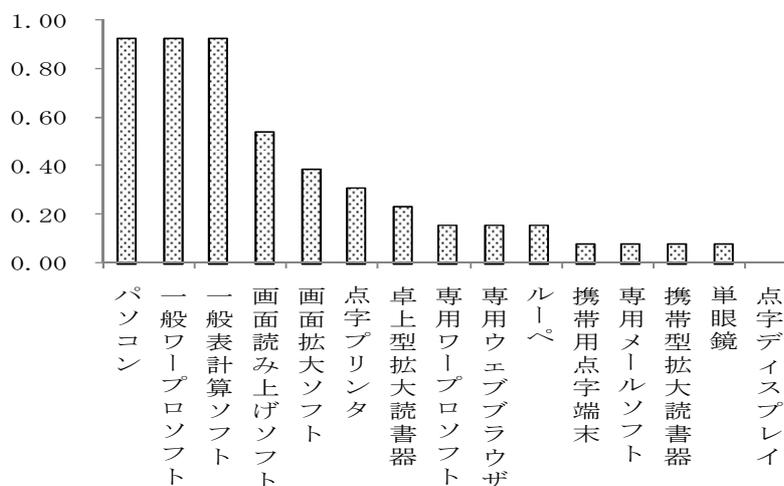


図9-2-2 大学で準備されている支援機器・視覚補助具 (墨字)

(3) 大学の予算による準備を希望する程度

点字使用学生では、希望する値が高かったのは、画面読み上げソフト (0.91)、パソコン (0.82)、一般ワープロソフト (0.82)、一般表計算ソフト (0.77)、点字プリンタ (0.75) でした。次に専用 web ブラウザ (0.66)、専用メールソフト (0.55)、専用ワープロソフト (0.46)、点字ディスプレイ (0.45) を希望していました。携帯用点字端末の希望の値は 0.23 でした。

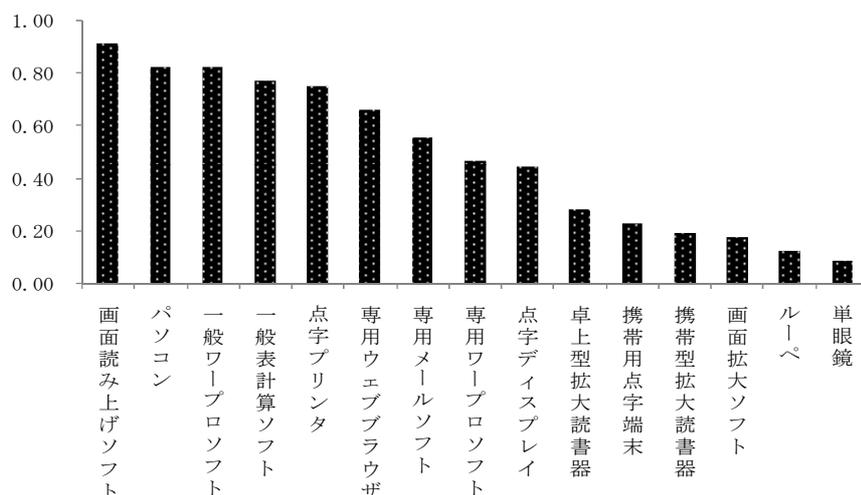


図9-3-1 大学の予算による準備を希望する程度 (点字)

墨字使用学生では、希望する値が高かったのは、一般ワープロソフト (0.73)、一般表計算ソフト (0.69)、パソコン (0.65) でした。次に画面拡大ソフト (0.31)、ルーペ (0.31)、画面読み上げソフト (0.27)、単眼鏡 (0.19)、卓上型拡大読書器 (0.15)、携帯型拡大読書器 (0.15) という結果でした。

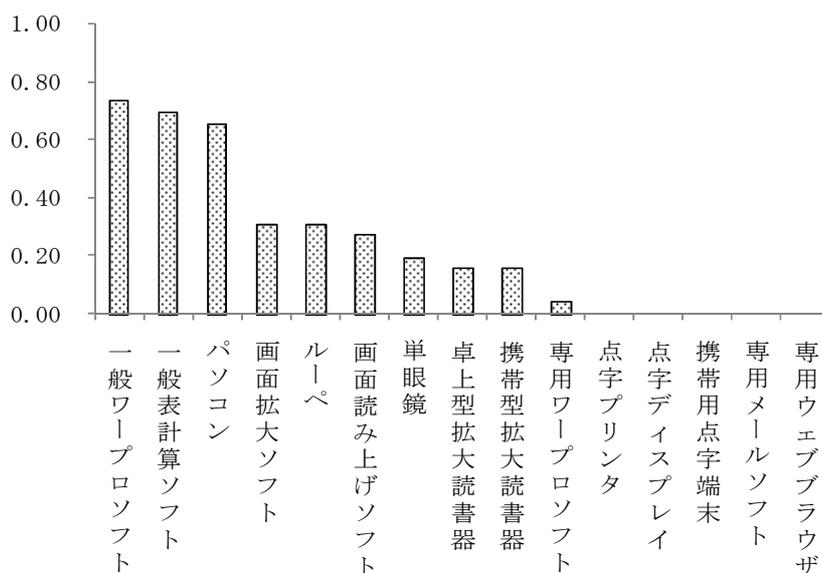


図9-3-2 大学の予算による準備を希望する程度 (墨字)

全体を通して点字使用学生では、パソコン、画面読み上げソフト、一般ワープロソフト、一般表計算ソフトは現在よく活用され、大学にも準備されており、大学の予算で準備してほしい希望も高くなっていました。ソフトウェアの中で、視覚障害者専用ワープロソフトや専用メールソフトはある程度活用されており、大学の予算による準備の希望もありましたが、現状では十分に準備されてはいませんでした。

点字プリンタはきわめて多くの大学で準備されており、大学で準備してほしい希望も高い結果となりました。点字プリンタが現在活用されている程度が低くなっている理由として「学生本人が自由に使えるようになっていないから」という意見が複数の対象者から出されました。いずれにしても、点字プリンタは高額であり学生本人が購入するのは困難なため、大学で準備する必要があります。

点字ディスプレイについても、現在の活用の程度は低い結果となっていますが、これは、高額なので個人で購入するのが難しいためと考えられます。したがって点字プリンタ同様、大学で準備する必要があります。実際に準備している大学も半数近くあり、大学で準備してほしい希望もある程度高い結果となっていました。

携帯用点字端末については、現在活用している程度はきわめて高くなっていましたが、大学で準備されている程度や大学の予算で準備してほしい希望はあまり高くありませんでした。これは、携帯用点字端末は大学での学習や生活において常に活用する機器なので、個人で購入するケースが多いためと考えられます。ただし、使用機種をたずねると、基本的な機種を利用している学生が大半でした。最近はさらに機能が充実した上位機種も開発されていますが、高額で個人での購入が難しいため、今後は大学で準備する必要性が高まると考えられます。

墨字使用学生では、パソコン、一般ワープロソフト、一般表計算ソフトは、現在よく活用されており、大学で準備されている程度や大学の予算で準備してほしい希望も高い値でした。

画面拡大ソフト、画面読み上げソフトについての希望はさほど高くありませんが、墨字使用学生は見え方がさまざまであり、必要なソフトが個々で異なるため、全体の中での割合が低い結果になっていると考えられます。卓上型・携帯型拡大読書器についても同様です。

単眼鏡・ルーペは、現在活用している程度はかなり高くなっていますが、大学で準備されている程度・大学の予算で準備してほしい希望ともに低い結果となりました。これは、基本的には個人で自分に合ったものを準備しているからだと考えられます。

10. 施設・設備

点字使用学生には4項目、墨字使用学生には3項目の施設や設備について、大学で整備されている程度、整備を希望する程度を質問しました。

整備されている程度については、各項目で、「まったく整備されていない」を0点、「あまり整備されていない」を1点、「すこし整備されている」を2点、「かなり整備されている」を3点と得点化し、希望する程度については、「必要ない」を0点、「できれば整備してほしい」を1点、「必ず整備してほしい」を2点と得点化して、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点で割った値を求めました。その結果を図10-1（点字）、図10-2（墨字）に示します。

点字使用学生では、希望の割合の高い順に「教室番号の点字表示」（現状0.70、希望0.82）、「エレベーターの点字表示」（現状0.63、希望0.80）、「エレベーターの音声案内」（現状0.55、希望0.70）、「点字ブロックの整備」（現状0.71、希望0.68）という結果でした。現状は、どの項目もある程度整備が進んできていますが、希望を見ると4項目のいずれもかなり高い値であり、さらに充実する必要があると考えられます。

墨字使用学生では、希望の割合の高い順に「教室番号の拡大文字表示」（現状0.26、希望0.58）、「エレベーターの音声案内」（現状0.46、希望0.50）、「点字ブロックの整備」（現状0.54、希望0.35）という結果でした。教室番号の拡大文字表示についてはあまり整備されていませんでしたが、希望はある程度高くなっていました。エレベーターの音声案内と点字ブロックについては、墨字使用学生でも、ある程度利用したいと考えていることがわかりました。

今後はバリアフリー新法や各自治体の条例の下、この分野の整備はさらに充実していくことが期待されています。

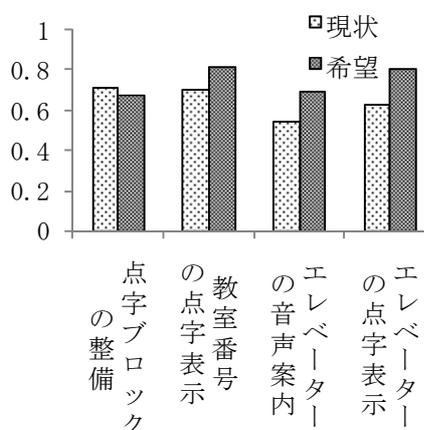


図10-1 施設・設備に関わる配慮(点字)

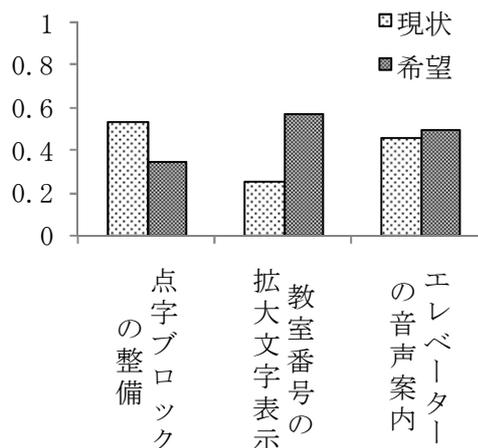


図10-2 施設・設備に関わる配慮(墨字)

11. 視覚に障害のある友人との関わり

視覚に障害のある友人との関わりについて、現在関わりのある程度（現状）および必要と思う程度（必要度）について質問しました。また、視覚に障害のある友人との関わりが役立つ場面について、複数回答可で質問しました。さらに、役立つ場面について選択肢にはない項目を自由に記述してもらいました。

視覚に障害のある友人と関わりのある程度については、各項目で「まったくつきあいはない」を0点、「あまりつきあいはない」を1点、「すこしつきあいがある」を2点、「かなりつきあいがある」を3点、必要と思う程度については、「全く必要ない」を0点、「あまり必要ない」を1点、「少し必要である」を2点、「かなり必要である」を3点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点（3点）で割った値を求めました。その結果を表11-1に示します。

視覚に障害のある友人との関わりが役立つ場面については、「役立つ」と答えた学生の割合を図11-1に示します。また、視覚に障害のある友人との関わりについて自由記述で意見を求めた結果をまとめました。

（1）現状と必要度

点字使用学生では現状0.95、必要度0.90、墨字使用学生では現状0.74、必要度0.64でした。点字使用学生は現状も必要度も極めて高い値を示していました。墨字使用学生についてもある程度高い値になっていました。

視覚に障害のある学生は、一見他の学生と同じ学生生活を送っていても学習手段は異なり、参加できる活動にも制限があります。したがって、晴眼の学生にはない悩みを抱えることも多いので、当事者の相談相手が必要です。しかし、視覚障害学生は各大学にごく少人数しか在学していないことから、大学を超えた当事者同士のネットワークが重要と考えられます。

表11-1 視覚に障害のある友人との関わり

	点字	墨字
現状	0.95	0.74
必要度	0.90	0.64

（2）役立つ場面

点字使用学生では、「役立つ」と答えた人の割合の高い順に、「点字・拡大文字・録音等の資料の情報交換ができる」(0.93)、「支援機器に関する情報交換ができる」(0.93)、「悩みの相談がしやすい」(0.75)、「視覚障害者が参加しやすいスポーツ・レクリエーション・趣味等の活動ができる」(0.68)、という結果になりました。墨字使用学生では、割合の高い順に、「悩みの相談がしやすい」(0.77)、「視覚障害者が参加しやすいスポーツ・レクリエーション・趣味等の活動ができる」(0.54)、「支援機器に関する情報交換ができる」(0.46)、「点字・拡大文字・録音等の資料の情報交換ができる」(0.23)という結果になりました。

点字使用学生は、「資料」や「支援機器」の情報交換で極めて高い割合を示しています。したがって、点字使用学生にとっては、視覚障害のある友人との関わりは、学習に必要な資料や支援機器に関する情報交換が最も重要であることがわかりました。続いて、「悩みの相談」や「レクリエーション活動」等を通じて心理的安定を図ることを求めていると考えられます。

墨字使用学生では最も高い割合を示したのは「悩みの相談」でした。墨字使用学生は周囲から障害が見えにくいため理解されず、当事者同士の心理的サポートを求めていると考えられます。「資料等の情報交換」についてあまり高い割合を示していないのは、拡大コピーや補助具の活用により、通常の資料に対応できていることが多いためと考えられます。

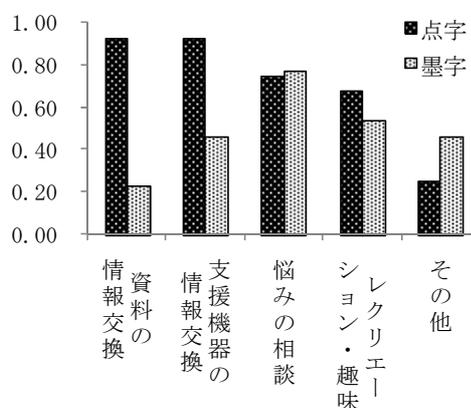


図11-1 視覚に障害のある友人との関わりが役に立つ場面

(3) 役に立つ場面に関する自由記述

視覚に障害のある友人との関わりが役に立つ場面についての自由記述には、「大学で直面する困難への対処方法について相談できる」、「学習環境や実体験が参考になる」、「晴眼の友人や教職員には理解してもらいにくい苦労や努力に共感してもらえる」、「晴眼の友人や教職員との接し方について相談できる」、「就職活動の方法や情報が得られる」、「歩行の際のオリエンテーションやランドマークに関する情報が得られる」、「気を遣わずに安心しておしゃべりができる」等の回答がありました。

12. 高校時代に身につけておくべき力

大学生活を送る上で高校時代に身につけておくべき力について、自由に答えてもらいました。主な回答は以下の通りです。

- ・白杖を使って一人で自由に移動できる力。
- ・自分に必要な支援を把握し、適切に依頼できる力。
- ・受け身ではなく、積極的に他の学生や教職員とコミュニケーションをとれる力。
- ・自分にはできないことを人に手伝ってもらったとしても、人まかせにせず、その内容や方法を積極的に把握する力。
- ・大学で学習するには様々な形態の電子データを自由に扱わなければならないので、パソコンや支援機器に関する知識・技術。
- ・多様で大量な情報に対応するため、携帯用点字端末を活用し、効率的にノートをとる力。
- ・普段点字を使っていたとしても、レポート等で漢字仮名交じり文を書くので、レイアウトを含めた墨字の知識。

この資料についてのご質問や、さらに詳しい情報については、下記にご連絡ください。

全国盲学校長会大学進学対策特別委員会事務局

(筑波大学附属視覚特別支援学校内 Tel 03-3943-5423, Fax 03-3943-5410)

シリーズ 視覚障害者の大学進学 別冊
視覚障害学生実態調査報告書

平成 21 年 6 月 25 日 発行

発行者 全国高等学校長協会特別支援学校部会
全国盲学校長会大学進学対策特別委員会